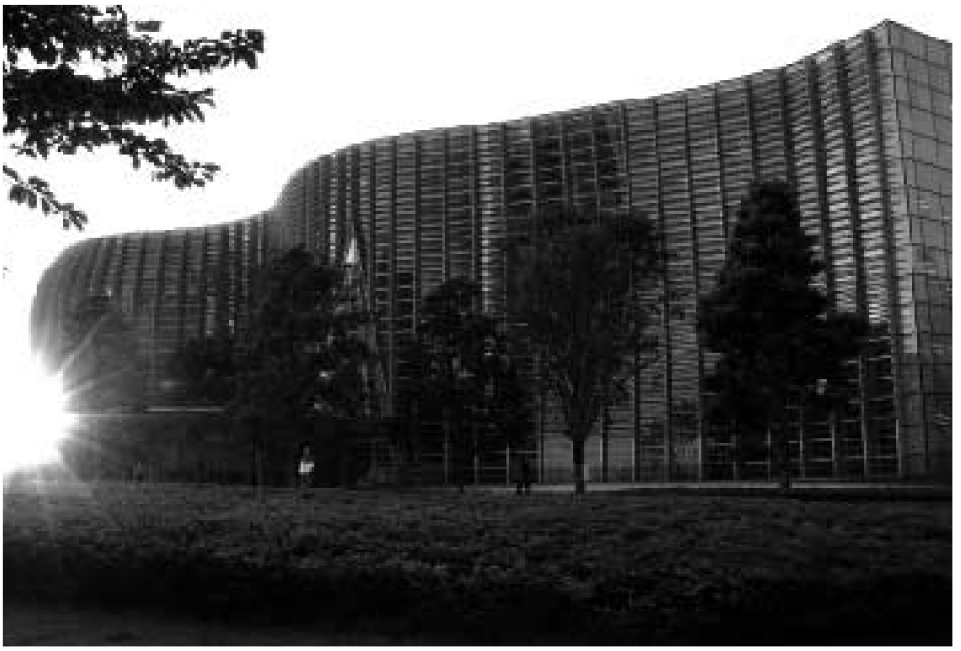
新制作

会報 No.54
発 行
2007年12月15日
編集・発行人
山 内 秀 臣

発行　新制作協会　〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202　Tel.03-5603-8350　Fax.03-5603-8360
http://www.shinseisaku.jp/



2007年・国立新美術館

第71回 新制作展 新会員・受賞者紹介

新会員

絵画部

松木正代（まつき まさよ）

◆三度の落選の後、「そのまま止めると悔いが残るよ」と励まされ、今日まで描き続けてきました。新美術館に移った年に新会員になることができ、うれしさと、身の引き締まる思いです。これからも自分の内にあるものを捜して、自分発見に精進していきたいです。

私の絵を楽しみに年を重ねてきた母にこのうれしい報告ができなかったことは大変残念です。

◆一九三七年神奈川県生まれ。跡見学園短期大学生活芸術科卒業。一九九三年第57回新制作展初入選。第66回、69回、70回新制作展新作家賞受賞。

眞野眞理子（まの まりこ）

◆初入選は、大学を卒業した年でした。絵を描く時間は至福の時で、祈りの時間でもあります。そんな風に絵を続けてこられたのは、新制作展に出品していたからです。先生方の力強く誠実な作品に感動し、暖かいご指導に助けられました。不器用な私ですが、これからも一層の努力を重ねてまいります。

今後ともご指導よろしくお願い申し上げます。

◆一九五五年千葉県生まれ。一九七八年女子美術大学卒業。一九七八年第42回新制作展初入選。第68回、70回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部

大野匠（おおの たくみ）

◆この度は会員に推挙していただき、ありがとうございました。幼い頃父に連れられて見に来た新制作展はとても華やかで、今でも強く印象に残っています。

初出品で賞を頂いたことは私にとって大きな勇気と決意を与えてくれました。そして、新制作を通して様々な指導を下さった先生方や先輩、多くの仲間と出会えたことをとても感謝しています。会員という重責は大きいですが、これを糧に今後とも努力し続けていきたいと思っています。

◆一九七七年高知県生まれ。二〇〇七年東京芸術大学大学院博士課程修了。二〇〇一年第65回新制作展初入選。第65回、66回、70回新制作展新作家賞受賞。

河西栄二（かさい えいじ）

◆自分の作品を厳しく見てもらえるという気持ちで新制作展に初めて出品した時は、誰も知る人がいないことを良しと思っていましたが、気が付くと多くの仲間ができ、会員の先生方にも励まされ、応援いただきながら過ごしてきました。

この度会員推挙をいただき、責任の重さを感じながらも、さらに自身の表現を精一杯行っていこうという気持ちでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

◆一九六六年山梨県生まれ。一九九五年筑波大学大学院芸術研究科彫塑分野修了。一九九五年第59回新制作展初入選。第67回、70回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

川島源次郎（かわしまげんじろう）

◆この度は、会員に推挙いただき誠にありがとうございます。協会ならびにスペースデザイン部の発展に微力を尽くせればと思います。どうぞよろしくお願いします。

◆一九七七年長崎県生まれ。一九九九年第63回新制作展初入選。第68回、第70回新制作展新作家賞受賞。

山口和加子（やまぐち わかこ）

◆初入選から2回入選した後、五年の間をおいて、共同制作で出品し始め15回を数えました。二人で作品を創る難しさを感じることもありましたが楽しさもあり、感性の似たパートナーに巡り会えたことに感謝して共同制作にこだわりをもって頑張ってきました。

今回新会員にご推挙頂き、これを新たなスタート地点として今までの枠を超えて色々な可能性にチャレンジしていきたいと思っております。

◆一九五五年東京都生まれ。一九八五年第49回新制作展初入選。第59回新制作展新作家賞受賞。

吉田淳子（よしだ じゅんこ）

◆スペースデザインは、共同制作が可能なので、山口さんと作品を制作し続けています。今年で15回目になりました。

今回は会場が国立新美術館に移り、そ

こで新会員になり、新たな出発点となることができました。

当初の制作意欲を持ち続けながら、新しい可能性にチャレンジしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

◆一九五七年茨城県生まれ。文化女子短期大学部生活造形学科卒業。一九九三年第57回新制作展初入選。第59回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞

絵画部

竹本義子(広島)　手嶋醇子(愛知)
鈴木幸子(岐阜)　高堀正俊(神奈川)
曽根三千代(香川)　高橋正樹(愛知)
森　弘江(大阪)　李谷素子(兵庫)
新保甚平(石川)

彫刻部

池田吏志(兵庫)　木原智代(東京)
小柳　力(秋田)　椎名良一(千葉)
平田義之(長野)　細田修己(大阪)
増井岳人(神奈川)　森　智之(岐阜)

スペースデザイン部

宇田　恵(長崎)　近藤愛子(群馬)
新海涼子(長野)　高橋　綾(神奈川)
野口真理(北海道)　山本景子(青森)

71回展点描

審査・陳列

●絵画部審査と陳列の報告

絵画部　張替眞宏

第71回新制作展絵画部の審査は、今年から新たに始動した国立新美術館で9月の7日と8日の二日間行われた。

審査の方針としては、創立・創設の理念に立ち戻って、気持ちを新たに充実した展覧会にすること、全フロアを一段掛けの展示に心掛けたいと、厳しさを持って再スタートすることを確認した。パーセンテージも見直し、新しくカウンターも導入した。

本年の絵画の搬入点数は一〇〇九点、搬入者数は三九八名。昨年と比べ搬入点数で二一点減、応募者は一名増であった。最終審査の結果、入選者は二一五名、入選点数二二一点、その中で初入選者が一五名、再入選者数は二〇〇名である。入選者数は昨年に比べ五五人減り、二点入選は再審査の結果六人に増加した。厳しい審査の中で、質の高さがうかがえる。新会員二名、新作家賞九名が選ばれた。

陳列は、まず絵画部会場入口に「この九人から始まった」（創立会員一同の写真パネル）と、協会マークをモチーフにしたテーマパネルの展示をディスプレイとして実施した。

展示会場は、出品者・協友・会員の別なく二点作家も一段掛けの展示にした。2階・3階の区別もなくし、各階の展示空間の構成、可動パーテーションの位置も、出品調書や全出品作品の写真撮影などから、百分の一の模型を作って可能な限りのシュミレーションを何度も準備段階から行った。準備委員、関係の図録・陳列の地方委員等も含めての、各委員の苦労・努力に感謝したい。さらに、今までの第一室という観念をなくし、若い作家を中心に、自由な発想で立体作品やインスタレーションなどの特別展示として実験ルームも試みた。

遺作は大國章夫氏の作品二点でご冥福をお祈りした。

しかしまだ今後の課題は沢山ある。72回展に向けて、残された課題を克服し、さらなる魅力ある新制作展にしていきましょう。

●彫刻部審査後記

彫刻部　山縣壽夫

昨年に比し二十数名の出品者の増加、したがって応募作品も二十数点の増加となった。

今年の彫刻の審査は、結果として入選作品数が昨年とほぼ同数に近い数であったため、数字の上だけではその分少し厳選となったといえるのかもしれない。

新美術館での初めての展示を踏まえ、今回、応募規定で作品ごとの最大床面積を相当大きくするよう変更した故か、二次元方向に広がる作品が多かったといえると思う。

この規定の変更は、床面積制限を少しでも広くすることによって、より自由な表現、より意欲的な表現につなげることが出来ればとの期待を込めてのことであったが、残念ながら、今回必ずしも成功したとは思えない。多数の作品を一同に並べねばならないのは公募展のもつ宿命かもしれぬが、限られた空間をより有効に、生きた空間とするためには、一私見ではあるが、今回のように作品の大きさに置き換えられてしまった床面積増よりも、それは本来存在すべき個々の作品の

周囲を取り巻く空間に与えられるべきものと思われる。

展覧会初日の授賞式の折、今年の審査に対するコメントを求められ、少し気になっていたことを申し述べた。それは今年に限ったことではないのかもしれないが、特に若い出品者の方々の作品に、技術的な上手さ下手さ以外、発信してくるメッセージも、制作者の意思も何も感じ取れない作品が多すぎることをどう解釈すれば良いのだろうか、と問うたものであった。多分私一人の感想ではないとも思われるが、いかがでしょうか。

新会場を意識し、発表された意欲的な秀作については何も言及しなかったことをお詫びし、彫刻審査後記としたい。

●搬入、審査そして陳列

スペースデザイン部　森　史夫

9月5日、9時30分、予め配られていた入館証を首から下げて、ガードマンの指示で入館。いかにもきちんと「管理してます」の体制は都美術館にはなかった。国立と都立の違いなのか、それとも開館間もない緊張のせいか。

審査会場は、物流センターのようなプラットホームから作品置場につながっている場所をフルに使うしかない。その一角に机を並べていよいよ一般公募作品の受付が始まった。

プラットホームのシャッターはこの日は全開で、今夏の記録的猛暑の名残りの外気がそのまま流れ込むので冷房効果半減。でも、都美術館の地下3階の淀んだ空気よりはまだましか。

新制作展として、今春オープンしたばかりのこの国立新美術館に会場を移してのメリットは、使用面積の拡大と、天井までの壁面パネルの配置のフレキシビリティであるが、スペースデザイン部門としては、都美術館では不可能だった室の中央に天井から中空に吊る装置が大きな魅力ポイントである。この装置の活用を前提とした「中空吊り作品」の応募は案の定多く、さながら「浮遊作品」解禁日。

審査会場には天井から吊る装置はないが、一作品ずつ拡げて下げて見ていては大変なので、壁に穿ったビス穴を使ってパイプを懸け手加工で何十個かのL型金具を作り、作品の意図がなるべく忠実に見えるように吊り下げるという気遣いをした。目に見えない大変な苦労がついてきたわけである。

中空吊りが可能になって、出品者の幅が広がったのか、あるいは新美術館への好奇心のせいか、昨年の70回記念展より応募点数が二九点増えた。ここ数年横ばいだったので、よろこばしい限りだが、中空吊りの扱いや手間を考えると、嬉しい悲鳴である。

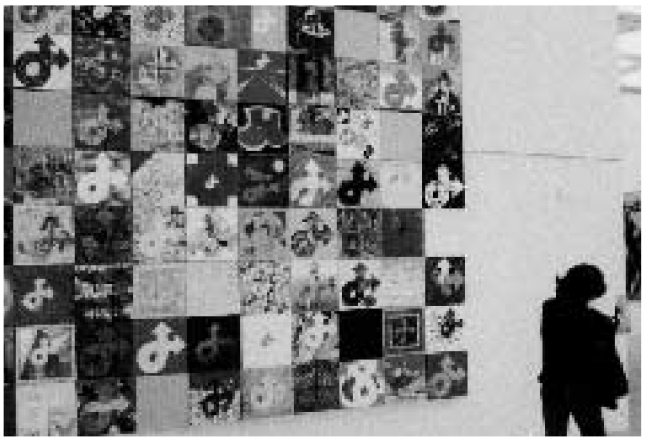
ちなみに、中空吊りの作品は、会員五点、一般応募入選作品八点であった。このジャンルの作品の展示方法は、今回がベストとは思えない。むしろ前回より狭く感じるという批判もあって、スペースデザイン会場の特徴にもなる大きな要素として、よりよい展示方法を探らねばならないと痛感したのは私だけではない。

終りに、もうひとつの優れた影武者を紹介する。新美術館担当委員の手による、長さ2mを超え、可動壁を動かして配置でき、屋外展示場まで付いた五十分の一の会場模型だ。70回展が終るとすぐ設計図を集め、現地を見、製作に取りかかった。3月にこの模型を使って、70回展の作品の大きさと数量によってシュミレーションし、入選点数の目安をたてることができた。「照明」的な作品のための暗い部屋を設定したり、受賞作家コーナーの位置づけなどを考えるのに臨場感のある提案を考えることができた。

今回の審査後、会員作品と入選作品のレイアウトは、この模型に作品の大きさを置いていく方法でスムーズに行うことができた。

71回展特別企画

六本木



国立新美術館と我々のことなど――

委員長　山内秀臣

96年2月、文化庁田中審議官からの諮問があり、新美術館に対し要望書を提出して欲しいとの依頼があった。このことから我々の具体的な活動は始まった。以前より各種の動きは多々見られたが、具体的な動きはこれをもって始まりとする。

少し時間をかけ、3部の代表者から作文を収集し、早朝に虎ノ門に委員代表たちが文化庁に提出のため集まった。小さなコーヒー店で、要望の採用を願いコーヒーで乾杯をして提出にと出かけたことが、なつかしく思い出される。

以降、紆余曲折を経て、今日、新美術館での07年度71回展が開催された。

言ってしまえばほんの数行の言葉ではあるが、その間の代々の委員諸氏の努力は誠に称賛に値する。

都立より国立へ。百年に一度あるかないかの選択。よくぞ！――と思える。

さて、

『我々は今、未来の入口に立っている』これを念頭に展示をはじめ一切の活動に集約したが、今の我々のすべてを示すことが出来たのか？の答は未来に託したい。

新時代に対応すべく、各部皆、若い委員を期せずして選出、先頭に立てたが、彼らは見事に新制作委員としてその資質を発揮したことは事実である。

もちろん、結果に百パーセントということはない。未来はそれらを補い修正し、我々のモットーである〝前進と向上〟しかあるまい。

本質の目的と俗化論。個人的解釈の主張。個性的な作家達。それらが渾然一体となっている新制作の場。そうしながらの七一年の年輪を重ねてきた。そして、我々はいまその一員である。

短絡に結果の批判は極めて危険な行為である。また、組織は常に不可避な問題を孕んでいることは周知の事実であろう。とにかく我々はここまできた。

今後の課題としていえることは限りないものがあるとはいえ、一つ一つていねいに解決し腰を据えてこの貴重な『場』を進めていくこととして、次のことが見えてくる。

一つは、この新しい環境を確実に取り入れていくこと。

一つは、言うまでもなく、各個人個人の作家としての前進。

どれも時間と膨大な努力を必要とする。

「過去は消去が出来ない。未来は造りださなければならない。」極めて簡単だ。それ故か、努力を怠りがちにしてしまう。

これまで会員各位の大きなご尽力は計り知れない力となって発展してきた。あらためて深甚の感謝を捧げる――。

果たしてこの一年正しく舵が取れたであろうか？　過去から未来につなげる一助として間違ってはいなかったであろうか？　深い反省と共に、もう少し時間をかけて未来に問いかけてみることにしよう。

全てを繋ぐために

彫刻部　上野良隆

「佐藤忠良特別展示」―「シード作家」―「ギャラリートーク／昔の塔・今の塔」が、彫刻部の今年の企画としての三本柱でした。

七一年間、新制作の彫刻が、時代に与えてきた影響や足跡を検証し、新たなスタートの今、方向性や足元を見失わないためにも、内外共に見直したいという思いで三年計画を立て、まず佐藤先生に特別展示をお願いいたしました。ギャラリートークでは澄川先生に、新夕ワーや国立新美術館の準備に携わられたこの機会に、ぜひ彫刻の社会性や可能性について語って頂きたいと考えました。

国立新美術館での新たな旅立ちに、当然として考える七一年の評価と、今後、「実験の場」「運動体」「人が集まる」「外に向かった展覧会」いくつかのキーワードを具体的にしたのが、今年の企画でした。

会場中央に位置した佐藤先生の特別展示と、そして真向かいに極力まとめて展示したシード作家達、屋外展示のシード作家達の作品。今年からスタートさせたシード作家制度には、熱い期待がありました。より展示を優遇し、いわゆる特別扱いをし、無審査で展示することによって、新制作の先人達がそうであったように、枠にとらわれずに大きな作家に育ってほしい、そしてこの会場がその場であること。彼らには、昨年からこのシード制の趣旨をていねいに説明してきました。今年、彼ら七人全員がそれに応え、会場の質量を上げてくれたと信じています。

創立当時まだ生まれていない我々今の委員が、正確に新制作の歴史や、今までの方向性に即したかはわかりませんが、今何をすべきかを真剣に考えた結果でした。彫刻部は、昨年今年、若い委員の提案を受け入れ実行させてくれました。そして佐藤先生、澄川先生をはじめ多くの先輩会員の方々が、私達のお願いに「僕にできることなら何でもするよ」と言って下さったことに心から感謝しています。一緒に苦労した委員達も、きっと同じ想いでしょう。

今年に自信を持って、将来に繋いでいく私達の責任が、今、始まったのだと感じています。

ひととき

71回展の新作家賞の賞牌は、絵画部の石阪春生氏に制作を依頼しました。

女のいる風景（リトグラフ）

新美術館での展示に寄せて

スペースデザイン部　藤原郁三

今年からは七十年に及ぶ都美術館での長い歴史に終止符を打ち、いよいよ国立新美術館での開催となった。

今までの都美術館とは全て勝手が違い、それこそ手探りでの準備となったが、協会委員・新美術館担当委員のこれまでの周到な準備に加えて各委員の努力協力のたまもので、無事開催にこぎ着けることが出来たことは何より喜ばしい。

新しい場所でのスペースデザイン部の展示に関しては、これまでよりも広いスペースが確保出来ることに加えて、例年よりも応募数が増えたこともあり、入選点数を従来よりも増やすことが出来た。

特に、新しい会場は天井から作品を吊るせることもあり、その種の作品が多く入選した。しかし、従来の床置き・壁掛けによる配置には慣れていても、天井から作品を吊るすのは初めてで、実際予測不能の空間レイアウトになり、何度も展示をやり直すことになって、例年になく手間取ってしまい、時間がギリギリになってしまった。しかも、吊るす作品が多かったせいか、展示イメージとしては都美術館よりも狭い感じになってしまった。

また、今までは空間配置にそれなりの平等感があったが、展示方法・スペースが多様になった分、バラツキが出来てしまった。

ただ、彫刻部との共有スペースとして屋外展示が新たに可能になったが、そちらはゆったりとスペースも取れ、なにより外部から直接搬入出来るので便利になった。

国立新美術館は場所柄来客数も多く、建築スペースも全体的には整然としておりゆったり感があるが、広いスペースに加えてまだ全体の機能が充分飲み込めていないためか、搬入搬出時は無駄な動線が多くなってしまった。

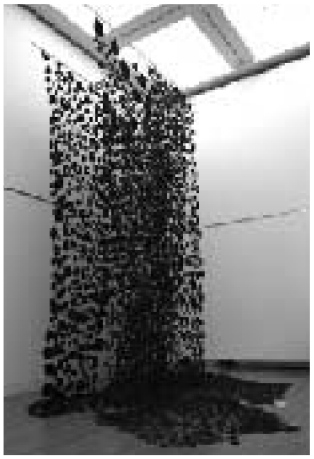
また、新美術館は機能上、3部の展示スペースを回る場合、その都度再入場が余儀なくされてしまう点が、管理上大変だという印象を持った。

なにより、全てが初体験ずくめで戸惑うことばかりだったが、これは、回を重ねていくことでクリアーしていけることなのかもしれない。

それにしても、新美術館の特徴である、正面の大きく波打ったダイナミックな空間に比べ、展示スペースは箱形で、それほど新鮮みが感じられない。むしろオーソドックスでさえある。とりわけ屋外展示場は、建物の裏側が見え、新美術館特有のイメージは全く伝わらない。しかも、間仕切りのコンクリート壁が、せっかくの緑の借景を遮ってしまっているのは残念だ。

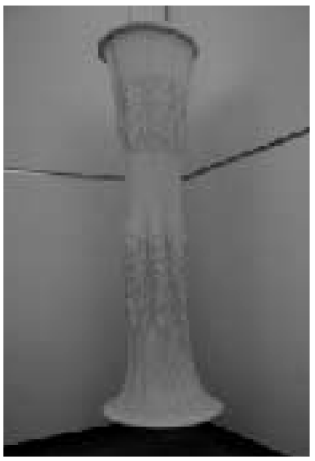
これもまた、そのうち慣れてしまう風景になってしまうのであろうか？

スペースデザイン部 前年度受賞作家展 （71回展と同時開催）



▲島田美和
derivation（フェルト）
H480×W300×D200cm

◀川島源次郎
空に続く（桐）
H160×W180×D80cm



▶大庭安仁
繊維と彫刻
（ウールと麻）
H300×W80×D80cm

◀前田亮二
イトクズ君（宴）
（ポリエステル樹脂）
H80×W90×D180cm

▶高松智子
音のない革命
（綿とポリエステル糸）
直径160×H50cm

＊受賞作家展＊

71回展新作家賞受賞者による受賞作家展を左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティーも行います。皆さまのお出でをお待ちします。

絵画部

■会　期　08年2月10日(日)～16日(土)
■会　場　銀座東和ギャラリー
☎03－3542－8662

彫刻部

■会　期　08年2月18日(月)～3月1日(土)
■会　場　ギャラリーせいほう
☎03－3573－2468

スペースデザイン部

■会　期　08年2月10日(日)～16日(土)
■会　場　建築会館ギャラリー
☎03－3456－2016

《お　知　ら　せ》

◇巡回展開催

＊2007新制作京都展
会期　07年10月23日(火)～11月1日(木)
会場　京都市美術館

＊第71回新制作絵画展（名古屋）
会期　07年11月13日(火)～11月18日(日)
会場　愛知県芸術文化センター
　　8階ギャラリー

＊第71回新制作絵画展（広島）
会期　07年11月27日(火)～12月2日(日)
会場　広島県立美術館・県民ギャラリー

《伝　言　板》

◇絵画部協友推挙（入選15回以上）
田中佐代子(熊　本)　田村研一(京　都)
中西喜一(三　重)　能瀬まゆ子(京　都)
吉村安子(兵　庫)

◇新制作協会eメールアドレス
新制作協会事務所のeメールアドレスは以下のとおりです。ご利用下さい。
webmaster@shinseisaku.jp

訃　報

▼尾崎幸雄氏（絵画部会員）
二〇〇七年十月十六日、逝去されました。享年八十三歳。

▼古茂田美津子氏（絵画部会員）
二〇〇七年十一月二十日、逝去されました。享年八十五歳。

▼伊藤礼太郎氏（彫刻部会員）
二〇〇七年十一月二十二日、逝去されました。享年八十二歳。
心よりご冥福をお祈りいたします。

あとがき

あわただしい会場移転の一年間が過ぎ、来年度への課題も見えたところで、会報も新たな企画を検討中です。ご意見・ご提案を事務所までお寄せ下さい。（中野）

会報編集委員　絵画部・山口　都
彫刻部・藤森民雄　SD部・中野　威
〈カット〉武藤岩雄　（吉國写植室）